

# 清洲城下町遺跡現地説明会資料

平成 23 年 11 月 5 日

(公益) 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター

大成エンジニアリング株式会社



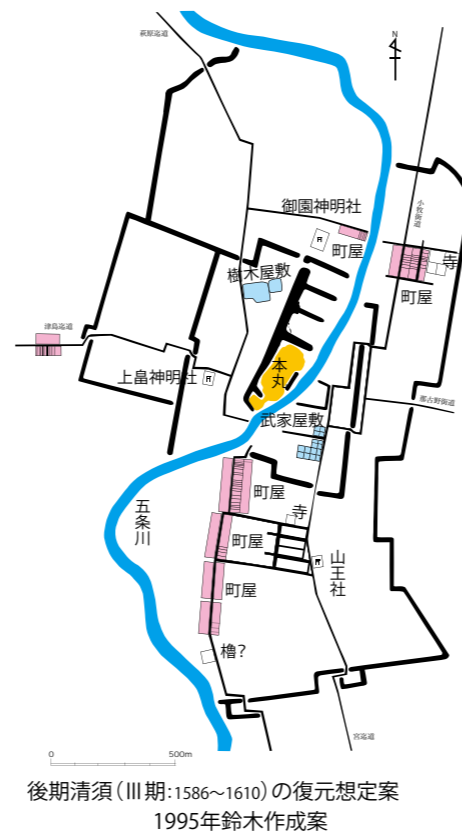
11A区第1面の調査風景

# 1 清洲城下町遺跡とは

清洲城下町遺跡は、清須城とその城下町全域を範囲とする広大な遺跡です。名称が示す通り、戦国時代の清須城を中心とする遺跡ですが、その広い範囲の中には古墳時代から江戸時代までのさまざまな集落遺跡を含んでいます。

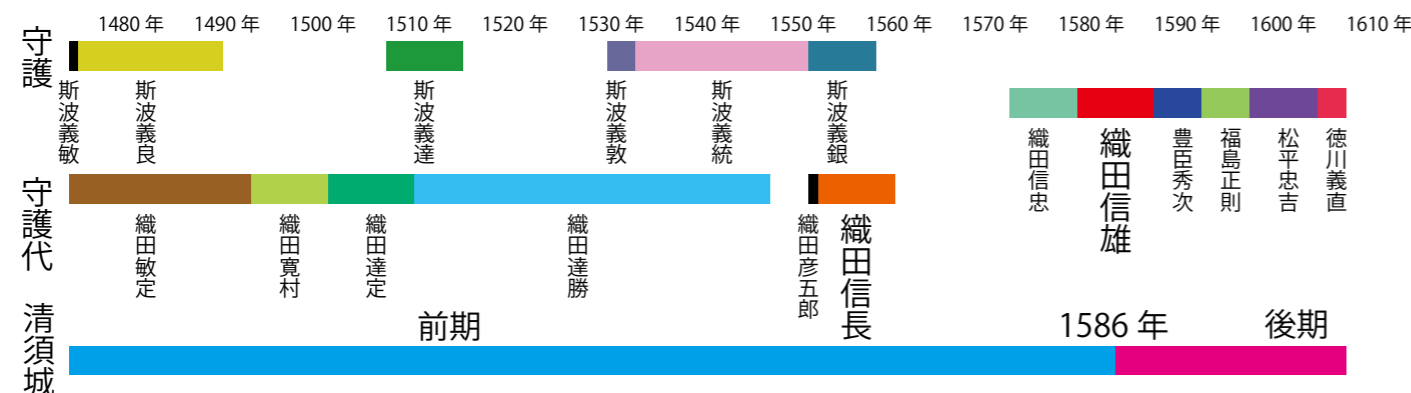
## 2 清須城とは

清須城は応永 12 (1405) 年頃築城されたと伝えられますが、文明 10 (1478) 年に尾張守護所が下津 (稲沢市) から移転したのをきっかけに大きく発展しました。戦国時代の清須城は守護館を中心に武家屋敷が展開し、川港や神社の門前に市が開かれる形で推定復元されています。織田信長が清須城に入ったのは、この前期清須城であったと思われます。前期清須城を変えたのが、信長の次男織田信雄です。天正 13 年 11 月 (1586 年 1 月) に発生した天正地震により大きく被害を受けた清須城とその城下町を大改修しました。城下町全域を三重の堀で囲み、本丸は石垣で周囲を固め瓦葺きの天守を建てました。これを後期清須城と呼んでいます。慶長 15 (1610) 年に徳川義直は尾張の中心を清須から名古屋へ移す清須越しを行い、清須城は廃城となりました。その後は美濃街道の清須宿として繁栄を続けました。



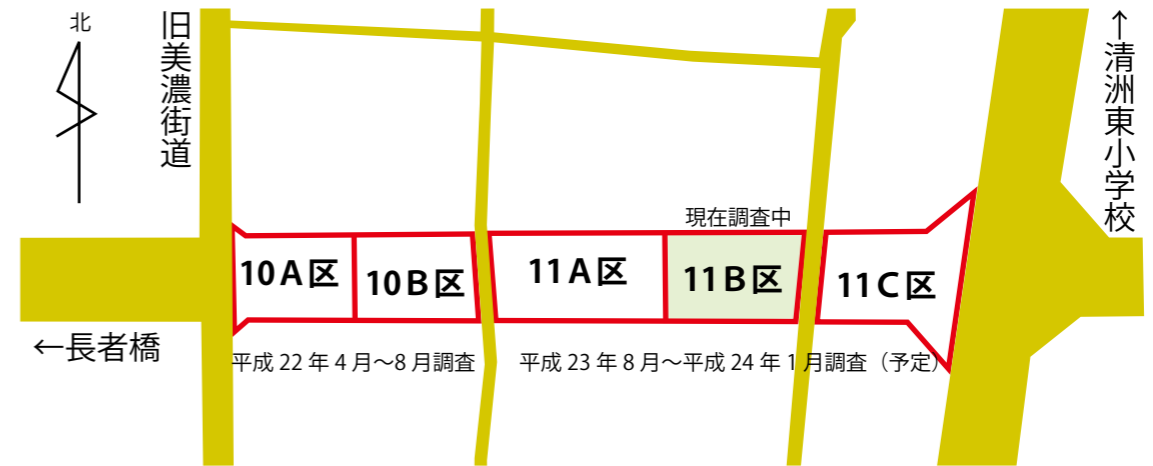
## 3 これまでの発掘調査

発掘調査は、昭和 57 (1982) 年の朝日西遺跡 (現在は清洲城下町遺跡と改称) の調査から始まりました。これまでに 100 ヶ所以上の調査区で約 10 万㎡の面積 (遺跡全体の約 2%) が行われました。後期清須城の堀の位置などは絵図や記録などからある程度は判明していましたが、それ以外の具体的な様子は発掘調査成果によりさまざまなことが明らかになっています。武家屋敷の遺構や遺物のあり方、町屋の遺構や遺物のパターンなどが徐々に分かり、城下町の変遷を推定できるようになりました。



# 4 今回の発掘調査の経緯

今回の発掘調査地点は、愛知県が建設を進めている助七西市場線 (街路新設改良工事 (住宅基盤整備)) の工事に先立って行われるものです。昨年度は道路予定地の西側 (780㎡) を 2 調査区に分けて行い、今年度はその東側 (1610㎡) を 3 調査区に分けて実施する予定です。発掘調査は (公益) 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センターが、国際文化財株式会社 (昨年度) と大成エンジニアリング株式会社 (今年度) の支援を受けて行っています。今年度の調査は、最初に中央の 11A 区から開始し、既に調査を終え、現在は 11B 区の調査を進めているところです。



## 5 今回の発掘調査成果の概要

広大な清洲城下町遺跡は、場所によって古墳時代の集落から江戸時代の宿場町や村などの遺跡が展開します。今回の発掘調査地点では、大きく 3 時期の遺構や遺物が発見されています。

### 1 平安時代の集落跡

11A 区で竪穴建物跡などが発見されました。昭和 62~63 年に行われた東側の県道部分の発掘調査でも遺構が見つかったので、今後は 11B 区と 11C 区でも成果が期待されます。

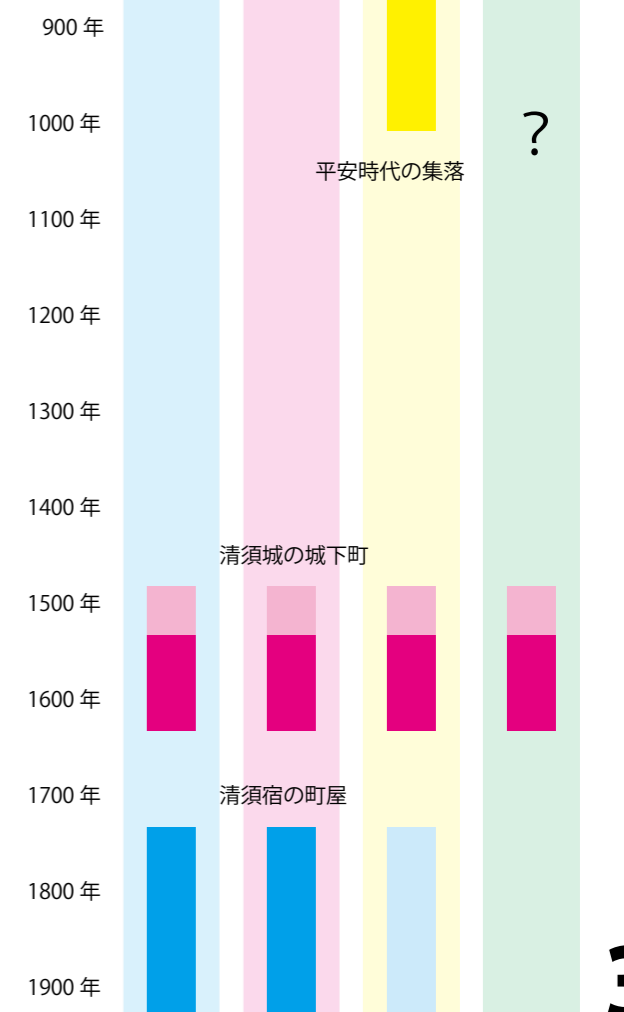
### 2 清須城下町の時代

今のところ全ての調査区で遺構や遺物が発見されています。

### 3 清須宿の時代

10A 区と 10B 区、そして 11A 区の西端部で、建物跡や井戸などが発見されました。11A 区の東半部から東は、美濃街道から離れていきますので、遺構の分布は減少するようです。

10A区 10B区 11A区 11B区



## 6 10A区と10B区の調査成果

10A区は3面（概ね3つの時代）、10B区は2面（概ね2つの時代）に分けて調査しています。10A区1面では、19世紀前後の建物跡と井戸などが確認されました。建物跡は多くの根石を敷いて柱を立てた大型の掘立柱建物跡で、調査区外に広がる可能性が高いです。井戸は常滑焼きの井筒を枠に据えたものと瓦を円筒形に並べた枠を据えたものがあります。10B区1面でもゴミ穴などが見つかりました。10A区2面と3面、10B区2面では16世紀中頃～17世紀初頭の遺構が存在します。井戸や溝などが発見されていますがその数は少なく、宿場町期の遺構や地震による液状化現象で遺構の展開状況はうまく把握できませんでした。



**10A区1面の遺構**（主に宿場町期：19世紀）  
東から見る：黄色が大型掘立柱建物跡、水色が井戸



**10A区3面の遺構**（主に城下町期：16世紀）  
東から見る：水色が井戸



**10B区1面の遺構↑**  
（主に宿場町期：19世紀）  
北から見る  
大きな穴は廃棄土坑（ゴミ穴か？）

**←10B区2面の遺構**  
（主に城下町期：16世紀）  
北西から見る  
中央の溝は武家屋敷の堀か？

## 7 11A区の調査成果

11A区は4面に分けて発掘調査しました。1面では19世紀前後の井戸・埋設甕やゴミ穴など宿場町期の町屋の裏手の様子を知る遺構群が確認されました。また、4面では10世紀前後の竪穴建物跡など平安時代の集落が発見されました。それ以外の1面から4面までの多くの遺構は16世紀中頃～17世紀初頭のもので、清須城の城下町に関連すると思われます。



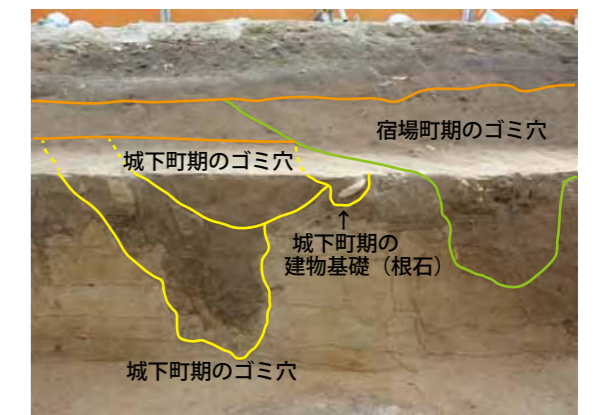
**11A区1面の遺構**（西から見る）  
色線部は宿場町期、その他は多くが城下町期  
水色は井戸、黄色はゴミ穴、赤色は埋設甕



**11A区2面の遺構**（西から見る）  
主に城下町期後期のゴミ穴、水色が井戸



**11A区3面の遺構**（西から見る）主に城下町期



**11A区の堆積状況**（南壁を北から見る）  
城下町期のゴミ穴に炭が大量に含まれる事例が多いです。

11A区での城下町期の遺構の中では、井戸の存在が注目されます。11A区では城下町期の井戸は全部で5基確認されていて、全て木製の結桶を井戸側にしたものと考えられます。

注目すべき点は、一直線上に並んでいる井戸の配置です。清洲城下町遺跡では、これまでにこのような井戸の並びが、朝日西地区・御園地区（美濃街道沿い）、河川改修関連調査の本町地区と南部地区、廻間地区（津島迄道沿い）などで確認されています。これらの井戸群は、道路に面して軒を連ねた細長い屋敷に伴うものと想定され、町屋を形成していたと考えられています（本資料2頁の後期復元図を参照）。

11A区でも東西方向に並ぶ同様の町屋が広がっていたと推測されました。



### 11A区で検出された鍛冶炉??

地面そのものがあまり焼けていないので炉跡と断定できませんが、周囲には炭化物や焼土が散らばり、穴のなかから鉄滓（てっさい）が出土したので鍛冶炉の可能性が考えられます。

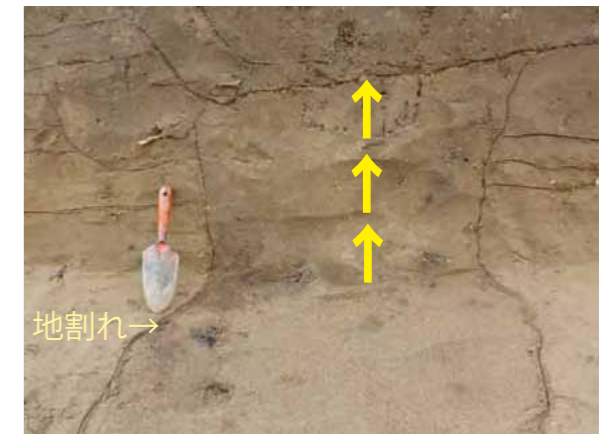
11A区では、鍛冶作業の際に出る不純物の塊（鉄滓）や焼けた炉壁などが多量に出土しており、鍛冶職人がいたことが分かりました。



11A区4面の遺構（西から見る）水色は城下町期の井戸、黄色は平安時代の竪穴建物跡  
その他は多くが城下町期のゴミ穴か柱穴

## 8 天正地震の痕跡

天正大地震は、天正13年11月29日（1586年1月18日）に発生した大地震です。近畿から東海、北陸にかけての広い範囲に甚大な被害を及ぼしたと言われています。清洲城下町遺跡では、昭和63年に初めて天正大地震による可能性の高い液状化の痕跡が発見され、今回の発掘調査でも同様の痕跡が見つっています。



### 11A区南壁土層断面（東部）

写真よりも下位に堆積する地下水を含んだ砂層が地震によって揺すられて液体の性質を持ち（これを液状化現象という）、揺れた砂層が上位のやや堅いシルト層貫いて吹き上げた様子。

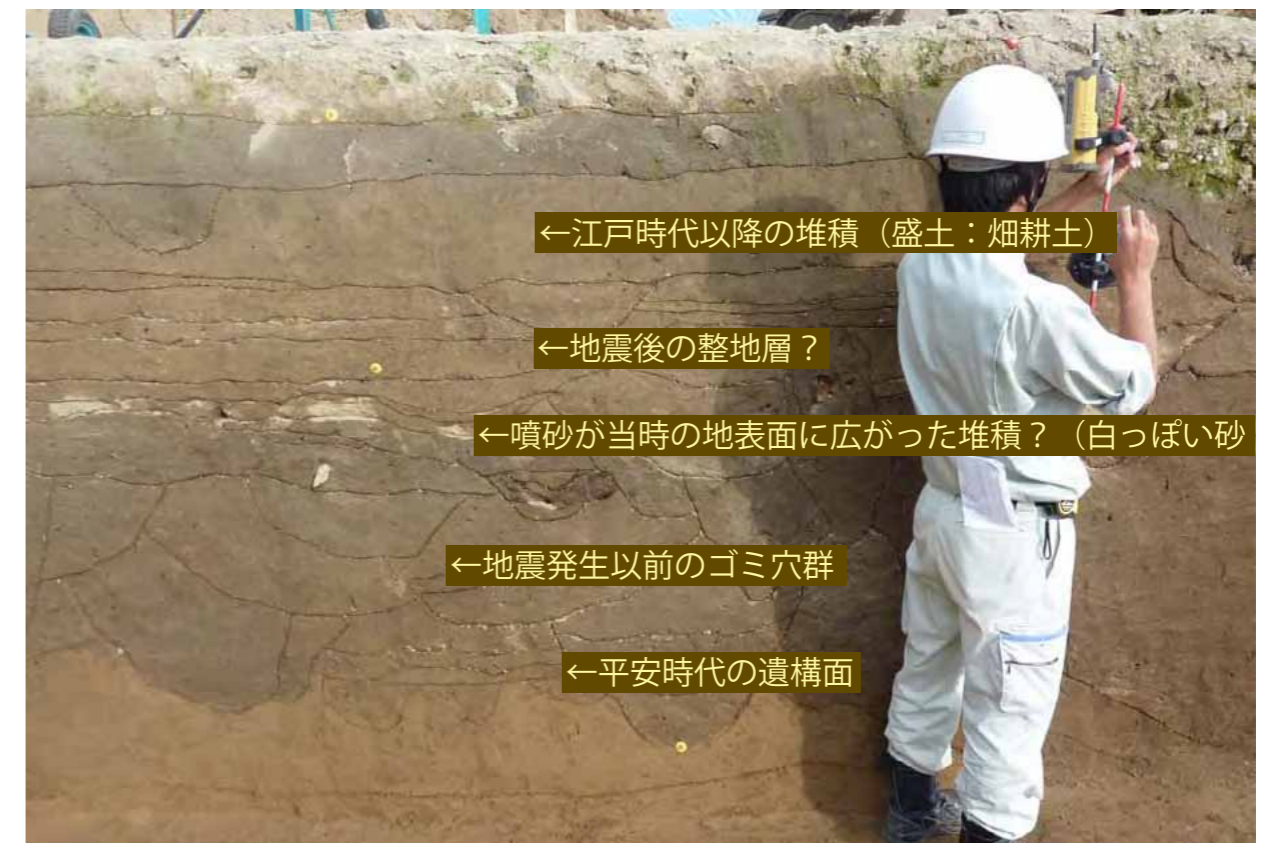


### 11A区北壁土層断面（西部）

Aは吹き上げた砂脈、Bは吹き上げた砂の堆積？、Cは下にあった砂が吹き上げたために上の地盤が沈下してしまったもの？

### ↓ 11A区東壁土層断面

写真中央の白い砂の堆積は、その状態から水によって運ばれたものではなく、地震による液状化現象で吹き上げた砂の堆積？と推測されました。その上位には人工的な盛土で整地された堆積と、そこから掘り込まれた遺構などが確認されました。そこから出土した遺物は城下町期後期（16世紀末～17世紀初頭）のものでした。また、砂層の下位にあるゴミ穴からは城下町期前期（16世紀末中頃）の遺物が出土しています。これらの状況から、吹き上げた砂の堆積が天正地震によるものだと推測されるわけです。



←江戸時代以降の堆積（盛土：畑耕土）

←地震後の整地層？

←噴砂が当時の地表面に広がった堆積？（白っぽい砂）

←地震発生以前のゴミ穴群

←平安時代の遺構面

